

鎮將府日誌に戦傷記事を見出した。因州は七名全員が病院日記にきつちりのつており、江城日誌や鎮將府日誌にも記載されていた。しかし何故か太政官日誌には見出せなかつた。

入院戦傷者を診療した医師は、土佐は弘田玄又以下六名、因州は上島千里以下三名、薩摩は有馬意運以下四名である。

入院戦傷者の死亡率は土佐八・五%、因州三六・八%、薩摩は一四・三%であつた。

なお受傷日から入院日までの平均日数は、土佐三〇・七日、因州七・三日、薩摩七・八日、である。入院戦傷者死亡率と入院日までの平均日数とが反比例する理由は現段階では判然としない。

(平成十年二月例会)

大隈重信の切断手術から 健康生活へのセルフケアに関する研究

坪井良子

本研究は大隈重信の負傷から右大腿部の切断手術とその回復、さらに義足装着に至る過程と社会復帰、その後の健康維持に関するセルフケアの一連の状況ととりあげ、今日的観点から考察することを目的とする。

外務大臣大隈重信(一八三八一—一九二二)の負傷事件は、明治二二年一〇月一八日条約改正に反対する来島恒喜の投げた

爆弾によつておきた。

大隈の大腿部切断手術には主治医の池田謙斎、橋本綱常、高木兼寛、伊東方成、佐藤進、ドクトルベルツ、高階経本が当たつた。手術時の詳細な記録は高橋種紀が「大隈伯病床日誌」として、二九×二〇センチメートル、一五頁、体温表付で毛筆で書かれ、術直後から第一五週に至るまでの記録を残している。他大隈の遭難に関しての治療他詳細な手紙が残されている。

治療に際して、外科的療法は橋本、高木、佐藤の三氏があたり、佐藤進の執刀によつて手術が行われた。麻酔はドクトルベルツが当たり、「午后七時五十分『コロロホルム』ノ吸入ヲ施シ麻酔ノ応スルニ(略)大腿下三分一ノ處ニ於テ皮膚ヲ輪状ニ切開シテ之ヲ上方ニ反翔シ次テ筋肉ヲ切断シ骨膜ニ達シ亦之ヲ上方ニ反翔シ之ヨリ骨膜ヲ剝離シ骨質ヲ鋸断セリ(略)股動脈深股動脈及ヒ二三ノ太キ静脈管ヲ結紮シ皮膚ト筋層ヲ共ニ縫合シ内外両端ニ排泄口ヲ備ヒ疝度『ホルム、ガーゼ』ヲ貼シ固定縋帯ヲ施シテ直ニ病褥ニ就カシメ(略)」と記されている。日誌には最初に駆けつけた医師高木兼寛が直ちに救急処置を施したために出血を免れたことは幸いであつたと記され、高木は直ちに東京慈恵医院看護婦教育所生徒四名を派遣して看病にあたらせた。看護婦が記した体温表、尿量、食事献立並びに摂取量、睡眠時間表などが残されている。

第一回の包帯交換は一週目に行い、二台の蒸気スプレーを装置し、百倍石炭酸水の蒸気で室内の塵埃を沈底して、包帯

を撤去し、縫合糸を除去して包帯固定を行った。第二週から四週にかけて症状は軽快し、食欲も増進して安眠できるようになった。第八週で創面は一銭銅貨大となり、全身浴を行い、来客に会い、官邸を出て私邸に移るまでに回復した。第九及び一〇週に至って創口は殆ど癒痕で被われたが、僅かに中心一点の肉牙を残したが断頭に浮腫と疼痛を起し、癒痕の外端に瘻孔を生じ、稀汁が漏れたため、縦径に「ツオル」の切開を行い、腱膜頰廢を多量に出した。第一二週の終りに断頭は癒痕を形成し、内端部に一小瘻孔を残すのみとなったが、断腿の浮腫がとれなく、安眠を妨害し、第一三週、一四週に至って按摩法によって漸次断腿の浮腫が消失、ようやく安眠ができるようになった。第一五週で温浴法と按摩法を施行し完全に治癒した。容体の良好な経過には、大隈自身の健康な身体と楽天的な性格、綾子夫人の決断の速さ、優れた医師の技術、看護婦の看病があつた。看病の様子は、夫人からの礼状によると、周到綿密、細心誠意よく職務に当たり、着々と機を誤らず、病者の意を汲み、声なきに聞き、形なきに見て、その一動一作が看護婦として立派であつたと述べられている。明治二二年一月一日付の池田謙齋・高木兼寛・橋本綱常連名の診断書によると、体力も回復し、重要な談話も許可され、少しずつ復帰していくことが可能になった。翌年四月中旬に至って断頭の創口が完全に癒え、義足を装着して運動を開始した。同年五月一三日天皇・皇后両陛下に拝謁し、御礼を言上するために参内している。この時初めて義足を装

着して両陛下に拝謁したものと推測できる。義足はアメリカA・A・マークス社製の義足を装着して社会復帰した。

当時のわが国は義足製造の技術は未熟で、義足そのものが定着していなかった。大隈の装着した義足は、わが国の義足の発達と普及に努め、恩賜の義肢へと発展していった。早稲田大学所蔵の大隈が装着した義足五本は、本研究によって初めて明らかにされた。義足について大隈は、アメリカ製造が良いといっている。わが国の義足製造は、不親切で不熱心で、未だ徳義心が発達していない、このことは憤慨に堪えない事であるといひ、義足は軽くして、値段を安くすることに心がけなければならぬといっている。大隈の義足生活は、特に夏期に義足の当たる断端部が擦り剥け、その痛みで度々発熱することがあつた。断端に食い入るような痛みにも耐え、応急処置をし、客と接し放談高論し、閣議に出席した。大隈は人生一二五歳説を唱え、その日常生活は規則正しく、独特の方法によって健康が維持された。生活様式を洋式化し、入浴法を重んじた。入浴時は運動と断端の保温に努め、血液循環をよくすることに努めた。精神の健康には、長生法五カ条、怒るな、愚痴をこぼすな、過去を顧みろな、望を将来におけ、人のために善をなせを守り、セルフケアに徹した。

大隈は晩年、胆石を病んだ。大正六年八月二二日からの看護記録に残されている。最後は摂護腺癌腫と萎縮腎により、大正一〇年一月二三日以降食欲不振、羸瘦が著しく、癌腫が転移し、大正一一年一月一日八四歳の生涯を閉じた。護

国寺の杜に「従一位大勲位侯爵大隈重信墓」として、また、佐賀市赤松町の竜泰寺に眠っている。

大隈のもたらしたりハビリティーションは今日的観点からも意義があると考える。

(平成十年二月例会)

眼科医療器械史のCD-ROM化

奥 沢 康 正

筆者は主に二つの理由から眼科医療器械史に関心を持つようになった。

一つは、鍼を立てる(白内障墜下術)術者の持つ大きな金鍼(メス)と女性助手の持つ大きな塗り碗(膿盆)が描かれた、眼科手術を描いた写実的な最も古い描写画「病草紙」の「目の少し見えぬ男」に触れたこと。

もう一つは、第100回日本眼科学会で一般公開された「百周年記念歴史器械展示」の展示委員として、資料保存と眼科機器のオリジナルを求めて所蔵調査に協力し、さらに記念事業として発行された「日本眼科学会百周年記念誌」の編集委員を兼任したことである。

所蔵調査の結果、これらを保管していると一般に考えられる大学などでは、医療器械類の新旧入れ替えに際して廃棄されることはあっても、現時点で古い器械類を保存していく体

制は整っていない。

諸外国の眼科医療器械保存の現状ではドイツのIngolstadtにあるGerman Museum of the History of Medicineでは、個人のコレクションから発して、現在は財団法人として保存管理され、所狭しと展示された多くの眼科器械はそれぞれ完璧に整備され、今でもすぐに使用できる状態で保存されていたことに驚嘆させられた。

筆者のコレクションは個人の私的な所蔵品であり、膨大な量に対し後日の学究対象として効率的な分類がなされているとは言い難く、また個人の物理的、経済的境界から最良の保存、公開の方法が採られていない現状が一方にある。保守管理の点からも、個人が永続して保存するには限度がある。これらのコレクションは、ドイツの例を見るまでもなく本来は公的機関に準じた博物館設立というゴールを目指すべきかとは思いますが、個人のレベルでは実現への道程はまだまだ遠いように思う。

そこで、(1)眼科器械保存の現状、(2)眼科器械発達史の文献検索法、(3)眼科器械保存の難しさ、(4)個人レベルでの保存法の各項について述べ、最後に(5)CD-ROM化として、器械の一つ一つが三次元的にビジュアル化され、器械の使用法などを含め多くの項目によって検索ができるバーチャルミュージアムとしてのCD-ROM作成を考え、この経緯を述べた。筆者の蒐集した史料に掲載された全ての器械写真を基にして、これを分類整理し、さらに一つ一つの器械史料を添えてカタログ